ひょうご人権ジャーナル

きずな

ひろげよう こころのネットワーク

2013年
（平成25年）
7

特集テーマ

多様性を認め合うために

多文化共生

7月1日	更生保護の日

犯罪や非行を未然に防止すると同時に、罪を犯した人や非行をした少年少女の更生と円滑な社会復帰を促進するための記念日。犯罪者予防更生法が1949（昭和24）年7月1日に施行されたことにちなみ、法務省が1962（昭和37）年に制定。

2 スペイン語版の昔話の絵本で親子のコミュニケーションを図る
ひょうごラテンコミュニティ（神戸市長田区）

3 多文化共生のまちづくりに向けて
乾美紀さん（兵庫県立大学環境人間学部准教授）

4 医療用語の通訳などで外国人患者をサポート
海星レディ・ボランティアグループ（神戸市灘区）

5 多文化共生をめざしたラジオ番組を制作
（公財）西宮市国際交流協会

6 多国籍の弟子たちとの暮らしが多文化共生のモデルとなる
ネルケ無方さん（安泰寺住職）

7 このあざは、ぼくの大事な宝物
藤井輝明さん（中央大学保健体育研究所客員研究員）

8 情報ぷらざ

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

特集

多文化共生

多文化共生の社会づくりに向けて、言語や宗教、生活習慣など、文化の違いや多様性を受け入れ、認め合い、共に生きる環境づくりが進められています。すべての県民が互いの違いを認め合い、共に生きていくまちづくりに向けてどうすればよいかを考えてみましょう。

近ごろの話題

スペイン語版の昔話の絵本で親子のコミュニケーションを図る

ひょうごラテンコミュニティ（神戸市長田区）

代表の大城さん

日本語とスペイン語を併記。オールカラー36ページ。兵庫県国際交流協会のホームページからダウンロードできます

日本の昔話　スペイン語版　検索

ひょうごラテンコミュニティでは、スペイン語を母語とする子どもと親への教育支援として、（公財）兵庫県国際交流協会と共にスペイン語版の日本の昔話の絵本を制作しました。「浦島太郎」「つるのおん返し」「桃太郎」「かさじぞう」の4つの物語を収載し、日本語とスペイン語を併記。母語教室の受講者に配布しました。

「日本生まれの子どもが母語を学ぶための教材は充実しておらず、また、移住してきた親は日本語を十分に理解できない人が多く、ほぼ日本語しか話せない子どもとのコミュニケーションが課題に挙げられます。日本語とスペイン語を載せることで、親子間のコミュニケーションに役立つのではと考えました」と代表の大城ロクサナさん。

絵本を読んだ人からは「親子ですてきな時間を過ごせた」「繰り返し読んでも飽きない」などと好評で、続編を望む声が高まっているそうです。

「母語を学ぶことはアイデンティティーの確立が図られたり、精神の安定を得られたりと、子どもの成長にとって大きな効果があります」と話すのは同協会の大辻清治さん。ひょうごラテンコミュニティは同協会と共同でスペイン語の防災教材も作成しています。

ひょうごラテンコミュニティ

2000（平成12）年、NGOワールドキッズコミュニティ内で活動を開始し、2011（平成23）年に独立。スペイン語圏出身者の生活向上や地域社会への参加を促進するための活動をしています。子ども向け母語教室の開催、情報誌「Latin-a」の発行、スペイン語による生活相談、ラジオ番組「SALSA LATINA」の制作などに取り組んでいます。

神戸市長田区海運町 3-3-8
たかとりコミュニティセンター内
TEL078（739）0633　hlc.jp.info@gmail.com

メッセージ

多文化共生のまちづくりに向けて

乾（いぬい） 美紀（みき）さん（兵庫県立大学環境人間学部准教授）

法務省の発表（２０１２年）によると、日本の在留外国人の総数は２０３万人に上り、兵庫県にも約９万８０００人の外国人が住んでいます。現在の日本では、外国人が工場での製造業、サービス業、介護など、日本人の労働力では足りない分野で活躍しており、もはや外国人はお客さんではなく、地域の労働力を担う貴重な存在だといえます。

外国人との共生のためにキーワードとなる言葉は、「インクルージョン(inclusion)」つまり「包括」することです。反対の言葉は「エクスクルージョン（exclusion）」すなわち「排他」です。現実には日本人でも個々が違い、隣人、果ては夫婦でさえ生活習慣が違いますので、国境を越えた人々との文化や習慣の違いはさらに明らかです。しかしこの際、外国人との共生に向けたまちづくりを前向きに考えてみてはどうでしょうか。

インクルージョンのための三つのステップ

インクルージョンのための第一歩のステップは、「多様性に寛容になる」ことです。私たちは外国人の文化や習慣を奇異に思うかもしれませんが、彼らにとって理解しがたい日本の文化も多くみられるでしょう。多様な文化や価値観を受け入れるゆとりを持てれば、外国人として見るのではなく、彼らも一人ひとり違った地域の人として受け入れることができます。

第二のステップは、「気に掛け、声を掛けること」です。外国人がいても自分は何もできないと考える人が多いかもしれませんが、外国人がバス停やスーパーなどで困っていたら、日本語でもいいので声を掛けてみてください。気に掛けること、思い切って声を掛けることからインクルージョンが現実のものになっていきます。

第三のステップは、「リアクションを起こす」ことです。地域の外国人支援のボランティアを調べて積極的に参加してみてください。日本語学習、子どもの学習支援など地域の力を必要とする仕事が山ほどあります。特に子どもの教育については、学校では対応しきれない課題を、地域が助けていくことが大切です。

以上のステップは私たちにとって難しいことでしょうか。一例を挙げますと、外国人が多い神戸市の深江地区では、多文化共生のまちづくりができつつあります。学校の教室でＮＰＯが母語教室を開き、福祉会館で地域のボランティアや学生が子どもたちに勉強を教え、まちづくり協議会、ＮＰＯ、大学などが連携して毎年「多文化こどもまつり」を開催して交流を促しています。まさに学校、ＮＰＯ、地域住民が連携して外国人を支え、外国人から学ぶというインクルージョンが実現しているのです。

外国人がいることは、地域の活性化につながりますし、多様性を受け入れることは、雑多な社会で生き抜く人間力や客観的な思考力を培うことにもつながります。「インクルージョン」をキーワードとして前向きに外国人を受け入れる、このようなまちづくりこそ、多様化する日本社会に求められる姿勢ではないでしょうか。

プロフィール　神戸市出身。大学卒業後、アメリカで日本語インターン教師をしていた時に、ラオスから逃れてきたモン族難民に出会ったことからマイノリティの教育に関心を持つ。ラオスを主なフィールドとするが、国を問わず、国境を越えたマイノリティの子どもたちの教育支援を研究テーマとしている。２０１２（平成24）年から現職。こうべ子どもにこにこ会運営委員・ボランティアも務める。著書に「ラオス少数民族の教育問題」（明石書店）、「子どもにやさしい学校－インクルーシブ教育をめざして」（ミネルヴァ書房）。

取材ノートから

医療用語の通訳などで外国人患者をサポート

海星レディ・ボランティアグループ（神戸市灘区）

国際港湾都市として発展してきた神戸。神戸海星病院にはかつて外国人船員の専用病棟が立っていたこともあり、現在でも英語を話す医師が常駐する国際内科があります。女性ボランティアの「海星レディ・ボランティアグループ」は、院内の受付や受診の方法に戸惑う外国人患者たちをサポートしています。

同グループは1972（昭和47）年に発足し、現在のメンバーは6カ国37人。少なくとも英語と日本語を話せることが条件で、グループとして11言語に対応できます。赤白のストライプ柄のエプロンが目印です。

日曜以外の午前9時から11時30分まで病院の総合受付に待機。受付や介助の手伝いのほか、時には患者に付き添って診察室に入ることも。医師と患者の意思疎通を図るためで、主な医療用語を網羅した手作りの辞書を駆使しながら、医師の言葉を丁寧に伝えます。

「硬かった患者さんの表情が和らぐのを見るのが何よりの楽しみです」と会長のモヒニ・ルパニさん。メンバーの一人、マニシャ・ラマニさんは「手助けすることで、相手からもさまざまな教えをいただきます。人と人のつながりを大切にしていきたいです」とにこやかに話します。

今では外国船の入港が減り、以前のように入院患者が母国へ出す手紙の代筆や日用品の買い出しを手伝うことはなくなりましたが、現在も海外から赴任した人や留学生など、外国人患者は全体の約7％を占めており、ボランティアはなくてはならない存在です。今日も赤白のストライプ柄のエプロンが病院内を忙しく動き回ります。

総合受付で待機するメンバー。右端が代表のルパニさん

診療科や病室への道案内、会計方法など、一つ一つ丁寧に対応します

代々受け継がれてきた医療用語辞書。11 言語をカバーしています

入院病棟を回り、患者の話相手になることも

まちのKIZUNAリポート

多文化共生をめざしたラジオ番組を制作

（公財）西宮市国際交流協会

（公財）西宮市国際交流協会では多文化共生の社会づくりの一環として２つのラジオ番組を制作し、地元のコミュニティーラジオ局「さくらＦＭ」で放送しています。

「元気印！ 国際交流」

放送開始から 13 年になる長寿番組。パーソナリティーの竹之内由加さんの進行で、日本人向けに国際交流に関する情報を提供しています。毎回、日本語が話せる外国人をゲストに招き、母国の風土や文化、日本の生活や日頃の活動などについてインタビュー。外国人住民の生の声を通して、多文化共生社会の大切さを伝えます。

毎回、市内の外国人をスタジオに招き、楽しいインタビューを繰り広げます

●放送時間／第 3・4 土曜 11 時 30 分～ 11 時 50 分

「世界のみんなとつながろう!!」

２００７（平成 19）年にスタート。現在は英語、中国語、ポルトガル語の３言語で生活情報や旬の話題、防災情報などを伝えています。とりわけ、住民登録や学校の編入学など行政手続きについての解説は、リスナーから大変分かりやすいと好評です。

放送原稿はスタッフの下村成子さんが作成し、本番前に外国人パーソナリティーと入念に検討します。「私の原稿のままではどうしても日本人の視点になりがちなので、パーソナリティーに意見を出してもらい、外国人の視点での情報発信を心掛けています。この番組が外国人住民の地域の担い手を育み、誰もが住みよいまちづくりのきっかけになれば」と話します。

パーソナリティーの皆さん

●放送時間／土曜 22 時～ 22 時 15 分
第 1 週：中国語
第 2・4 週（内容は同じ）：英語
第 3 週：ポルトガル語

（公財）西宮市国際交流協会
西宮市池田町 11-1 フレンテ西宮 4 階
TEL 0798（32）8680
FAX 0798（32）8678

西宮市国際交流協会 検索

さくら FM（78.7MHz）で放送。番組は同協会のホームページでも聴くことができます

この人に聞く！

多国籍の弟子たちとの暮らしが多文化共生のモデルとなる

ネルケ 無方（むほう） さん（安泰寺住職）

「禅僧になりたい」と20年前にドイツから来日し、2002（平成14）年に新温泉町の安泰寺（あんたいじ）の住職となったネルケ無方さん。同寺は檀家を持たず、ネルケさんは8カ国15人の弟子たちと自給自足の生活を送っています。

Q どのようにして住職になられたのですか。

A 私は7歳の時に母親を亡くしました。生きることの意味について考えていた高校生のころ、禅に出合い、禅を追究するために来日しました。京都大学で学びながら安泰寺をはじめ、京都や福井の寺で修行を重ねました。2002（平成14）年、師の逝去により安泰寺に戻り、9代目の住職となりました。

Q 弟子は半数以上が外国人だとか。

A そうです。15人いて、国籍はドイツ、フランス、シンガポール、米国などさまざまです。安泰寺のホームページは12言語に対応しており、彼らの多くはネットで寺のことを知りました。去年までは修行期間を最低3カ月間としていましたが、自給自足の生活がどのようなものか実感してもらおうと、今年から最低3年間を条件に受け入れています。

Q 普段の生活を教えてください。

A 朝4時から6時まで座禅を組むことから一日が始まります。昼間は農作業が中心で、米と野菜を育てています。炊飯は当番制で、自分たちで薪（まき）を割りかまどにくべます。農作業の後は、再び座禅を中心とした修行を行います。3人の子どもが12キロ離れた学校に通っているので、バス停までの送り迎えのほか、PTA活動にも参加しています。

Q 多文化共生を実現するために大切なことは。

A 弟子たちの間でたまにトラブルが起きます。原因は、日本の生活様式を知らないことや弟子同士がお互いの言葉や考え方の違いを理解できないことにあります。そんなときには、まず、相手を知ることが大切だと話しています。同じように、日本人も外国人と接する機会を多く持ち、考え方の違いを経験して、その上で理解しようと歩み寄ることが必要だと思います。

Q これからの目標は何でしょうか。

A 禅の素晴らしさとともに、自給自足の大切さも伝えていきたいと思っています。安泰寺にはさまざまな国の人が集まり、小さいながらも国際的なコミュニティーを形成しています。ここでの共同生活の試みが、多文化共生のモデルの一つになればと考えています。

プロフィール 1968（昭和43）年ドイツ生まれ。高校時代に座禅と出合い、ベルリン自由大学日本学科・哲学科の修士課程を修了後、京都大学へ留学。1993（平成5）年、安泰寺で出家する。2002（平成14）年、同寺の9代目住職に就く。著書「迷える者の禅修行 ドイツ人住職が見た日本仏教」（新潮社）、「裸の坊様」（サンガ）など。

試写室 じんじん（2013年）

〝絵本の里づくり〟で知られる北海道剣淵町をメーンに、震災後の宮城県松島町などでオールロケされた作品です。剣淵町出身の銀三郎は気ままな大道芸人のお調子者。たまに幼なじみが郷里で営む農場を手伝いに行っています。その農場が農業研修の修学旅行生を受け入れたことで、銀三郎は女子高生たちと知り合います。彼女らの中の一人が、離婚によって幼いころに別れた娘であることを知ります。娘は銀三郎に反発し、窮した銀三郎は絵本の力を借りて娘との絆を回復しようとします。

父と娘の話を縦軸に、剣淵町をはじめとするロケ地の自然の魅力、剣淵の人たちが絵本と読み聞かせを大切に紡いできたことを横軸に、人と人との心のつながりが感動的に描かれています。8月10日から元町映画館で公開予定。

監督：山田大樹　企画・主演：大地康雄　出演：中井貴恵、佐藤B作、村田雄浩ほか
問い合わせ▶兵庫県映画センター TEL078（331）6100

このあざは、ぼくの大事な宝物

藤井（ふじい） 輝明（てるあき） さん（中央大学保健体育研究所客員研究員）

私の右顔面には「海綿状血管腫」があります。血管の壁にできた良性腫瘍がはれてくる病気です。そのせいで、人とは異なる容貌を持っています。重ねて言いますが、これは病気です。でも、がんのように全身に転移し、人間を死に至らしめる悪性腫瘍ではなく、ほとんど転移することはありません。また、人に感染することもありません。両親はいつも、私の血管腫をさわりながら「これはあなたのチャームポイントなのよ。あなたのお父さんとお母さんは血管腫を含め、あなたを誇りに思っている」と言い続けてくれました。

よく講演会で全国を歩いていると「自分にはチャームポイントなんかない」という人がいらっしゃいます。「自分はもうだめだ、何も評価されないし、全く無視されている」。ともすればそんな思いで落ち込んでしまいやすいものです。しかし、そんなことはありません。あなたは必要とされ、とても役に立っています。この世に生を受けた者は、不要な人間などいないと私は訴えています。何かアクションを起こして、動いてみると、人との壁を取り払うことは意外と簡単なことだったりするものです。無視されているというのが、単なる自分の思い込みに過ぎなかったり。一歩踏み出すほんの少しの勇気を持ってみましょう。困ったこと、悩み事があればあなたの住む街で活動されておられる人権擁護委員の先生方に相談をしてくださいと全国で訴えています。

過去と他人は変えられません。でも未来と自分は変えることができます。だから自分の日常を少し変えてみる。すると、自分の周囲の人がそれに影響されて変わってくるのが手にとるようにわかるはずです。

さらに私の体験を話すと、昔、外を歩いていて人とすれ違う時、その人をにらみつけていました。「なんで僕の顔をじろじろ見るんだ」と。20歳くらいまで続きました。電車やバスの中で、人の視線が突き刺さるからです。「このバケモノ。よくそんな顔をして生きているな」なんて、えげつないことを言われたりもしました。そんな時、必要以上に自分を弱くみられないようにと、相手をにらみつけていたのです。いつも悪口を言われるわけではないのに、「なんだ、このバケモノは」みたいに思われているのでは、と自分でそう思い込んでいたわけです。相手をにらみつけていると自分も苦しいのです。つらいのです。また、なにげなくちらりと目が合っただけの人も、私ににらみつけられているので、「なんだ、コイツ」と嫌な感情が芽生えてきてしまう。もう悪循環です。ところがある時に友人や、地域の人権擁護委員の先生方が、「藤井さんは笑顔がキュートだから、いつもにこにこ笑っていた方がいいよ」と言ってくれたのです。私も笑顔でいた方が楽でしたから、目が合ったら、にらみつけるかわりに、にこっと笑うようにしてみました。目をそらしてしまう人は少数で、私の笑顔に、思わず笑顔でこたえてくれる人がほとんどでした。私は長い間、自分で自分の心に壁を作っていたのです。

過去と他人は変えられません。でも、未来と自分は変えられるのです。

また、他人と比較することが、往々にして自分の生きるペースを乱してしまうように思います。一人一人がだれにもまねのできない個性、チャームポイントを持っています。病気だって個性であり、その人のチャームポイントなのです。その個性を他人と比べることは必ずしも必要ではないのです。自分にしかないものを、お互いに比較することに、いったいどれほどの意味があるのでしょう。

「自分は世界に一つしかないかけがえのない存在であって、その自分の価値や個性をしっかり見つめて、自分自身に誇りと自信を持って生きていきなさい」とアドバイスしてくださったのも地域の人権擁護委員の先生方でした。たいへん感謝しています。

私が考えるに、比較するとしたら、自分の過去と比べるべきです。過去の自分と比べて少しでもチャームポイントが増えたかな、成長したかな、という点です。もちろん、人生にはちょっと立ち止まって休憩、ということもあります。でも、たとえ半歩でも一歩でも成長していく、その成長の前後を比較するといいでしょう。個性を他人と比べることをせず、幸せ、不幸せをまわりから影響されない強い気持ちでいたいと、私はいつも思っています。

プロフィール 医学博士。1957（昭和32）年、東京都国立市生まれ。中央大学経済学部、千葉県立衛生短期大学第一看護学科卒業。筑波大学大学院修士課程、名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。熊本大学医学部保健学科看護学専攻教授、鳥取大学大学院医学系研究科教授などを経て、2011（平成23）年から現職。著書は「あなたは顔で差別しますか－『容貌障害』と戦った五十年－」（講談社）、「笑う顔には福来る－タッチ先生の心の看護学－」（NHK出版）など。

情報ぷらざ

「ひょうご・ヒューマンフェスティバル 2013 in たんば」を開催

◎日時　8月3日（土）10:30〜15:30
◎場所　丹波の森公苑、柏原住民センター
※JR「柏原」駅から徒歩約15分、駐車場（約1000台）あり

人権講演会、人権啓発パネル等の展示、コンサート、ヒューマンシネマ、キャラクターショー、体験コーナー、販売コーナーなど、楽しい催しが盛りだくさん。ご家族、ご友人をお誘い合わせの上、ぜひお越しください。

■人権講演会／金澤翔子さん、泰子さん（書家）
※翔子さんはNHK大河ドラマ「平清盛」の題字を担当
■こころあったかステージ／立木早絵さんの弾き語り&トークライブ
■ヒューマンシネマ／阿部サダヲ、鈴木京香出演
「ぼくとママの黄色い自転車」ほか
■それいけ！アンパンマン ショー

「のじぎく文芸賞」作品募集中

〜あなたの思いを作品に書いてみませんか〜

◎募集部門／小説、随想、詩、創作童話
◎応募条件／県内に在住・在勤・在学の人
◎応募作品／インターネット上を含む未発表・未投稿の自作の作品
※詳細については協会ホームページか電話で確認してください
◎応募方法／郵送で受け付け
9月10日（火）締め切り
（消印有効）
〒650-0003
神戸市中央区山本通4-22-15
県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会
「のじぎく文芸賞」係

イベントガイド

多世代交流センター 人権講演会	●**日時**／7月11日（木）19:30〜　※無料、申し込み不要 ●**場所**／朝来市多世代交流センター　※JR「和田山」駅から徒歩約25分 ●**演題・講師**／「私たちはみんな必要とされている人たちなのです」中田武仁さん（国連ボランティア終身名誉大使） ●**問い合わせ**／朝来市人権推進課　TEL079（672）6122
人権啓発講演会	●**日時**／7月13日（土）13:30〜15:30　※無料、要申し込み ●**場所**／東条文化会館　※JR・神戸電鉄「三田」駅またはJR「社町」駅から神姫バス「天神」下車、徒歩約5分 ●**内容**／小学生の人権作文朗読、小林育栄ひとり芝居「学校へ行きたいねん！〜ただ愛してほしいだけ〜」小林育栄さん（舞台女優） ●**問い合わせ**／加東市人権教育課　TEL0795（48）3598
伊丹市 人権・同和教育研究協議会 全体研修会	●**日時**／7月23日（火）14:00〜　※無料、要申し込み ●**場所**／スワンホール　※JR・阪急「伊丹」駅から市バス「スワンホール前」下車、徒歩約3分 ●**内容**／講演「それでええやんか！ ―自分を信じて『ありのまま』に生きる―」中井政嗣さん（千房㈱代表取締役、社会教育家） ●**問い合わせ**／伊丹市人権教育室　TEL072（784）8113
第60回 兵庫県人権教育研究大会 丹波地区大会	●**日時**／7月27日（土）13:00〜16:40　※600円、要申し込み ●**場所**／篠山市立四季の森生涯学習センター　※JR「篠山口」駅から神姫バス「四季の森会館前」下車、徒歩約5分 ●**内容**／全体会、14分科会、基調講演「水平社宣言の現代的意義」友永健三さん（部落解放・人権研究所理事） ●**問い合わせ**／丹波地区人権・同和教育研究協議会　TEL079（552）7491
心かよわす 市民のつどい	●**日時**／7月30日（火）13:30〜15:40　※無料、要申し込み ●**場所**／神戸文化ホール中ホール　※神戸市営地下鉄「大倉山」駅から徒歩約1分 ●**内容**／講演「みんな 一人の価値ある人間です〜生まれ・障がい・性別で変わるものではないはず〜」鈴木ひとみさん（エッセイスト・バリアフリー啓発講師） ●**問い合わせ**／神戸市保健福祉局人権推進課　TEL078（322）5234

ハーフタイム

華やかな民族衣装やその国ならではの料理、なじみのない習慣などを紹介するテレビ番組を見ると、その多様さに驚き、世界は広いなあと感じます。以前、外国人を対象とした日本語教室を見学しました。多くの国籍の方が参加しておられ、あらためて地域の国際化を意識したものです。交通手段の発達により、広い世界も確実に狭くなっていると感じます。今後さらに増えてくる外国からの隣人と仲良くしていきたいものです。（小池）

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　info@hyogo-jinken.or.jp
兵庫県人権啓発協会　検索

2013（平成25）年7月発行